0-4-4

LIBRARY INFORMATION

目　　次

図書館の現在……附属図書館長　是永　駿　（2）
フランス語の綴り字について……助教授　木内良行　（3）
ヒンディー語文献書誌情報及び画像データベース作成
プロジェクトの成果公開に際して……名誉教授　古賀勝郎　（5）
ヒンディー語文献書誌情報及び画像データベース完成……専門員　（6）
総合研究棟（仮称）建設計画に関して……附属図書館　（8）
収書専門部会の活動について……専門員　（9）
運用係（２階カウンター）からのお知らせ……運用係長　（10）
平成12年度貸出図書ベスト30……（10）
平成12年度図書貸出統計・利用統計……（11）
平成13年度大阪外国語大学司馬遼太郎記念学術講演会……（12）
表紙の解題・編集後記……専門員　（12）

大阪外国語大学附属図書館　2001.9.26

第14号

図書館の現状

附属図書館長
是永　駿

これまでカード目録に頼っていた図書館も現在では電子入力による目録情報が主流となっている。本学でも2000年度から新たに収蔵した図書のカタロギングは電子入力のみとなり、昔ながらの書誌カードは作成しないことになった。いわゆる「図書館の電子化」である。この段階は書物という一次資料ではなく書誌情報という二次資料の電子化であるが、これが、すでに理系を中心として普及している電子ジャーナル、あるいは所蔵図書そのものの電子化というような一次資料の電子化に進めば、「電子図書館」が出現することになる。そうなると紙を媒体とした書物はいずれ姿を消してしまうのであろうか。あの、かすかなインクの匂い、頁を繰る手触り、手にした書物の重みといった読書にともなう身体感覚も不必要なものとなるのかと思うと、一抹の寂しさにとらわれるが、実際にはそう単純にことは運ばないようである。寺田光孝氏（図書館史）は「紙への依存は数千年間続き、人間の生理にまでなっている。この人間の生理機構の変化がない以上、紙への依存がなくなることは有り得ない。電子図書館の発達は十分有り得る。同時に、これまでの図書館も消えることはない。両者が並存するだけであり、どちらを主に使うかはそのひとによるだけのことである。」と述べておられる（図書館・情報メディア双書2『世界の図書館――その歴史と現在』、1999年）。

本学の附属図書館はすでに全蔵書60万冊の内の6割、36万冊の電子書誌目録を作成済みであり、本年7月に公開の運びとなったヒンディー語文献約1万3千点のデータベースに続いて、約6万5千冊を所蔵する中国語文献のデータベース作成プロジェクトがスタートした（いずれのプロジェクトも科研費を申請して認められたものである）。ヒンディー語の場合、画像情報として文献そのもの（標題紙・目次）に展開できるシステムなので、一次資料としても貴重な成果であり、「電子図書館構想への序章」（学術情報係・多田剛志氏の言葉）となりうるものである。こうした一次資料の電子的情報資源は本学の場合、四庫全書のCD-ROM版などを含め、まだほんの一部に留まっており、石浜文庫所蔵の貴重資料の画像データベース化や学術論文等の学内生産資料の電子化も未着手の状態にある。そうした電子的情報資源は設備、環境整備を待って徐々に蓄積されていくしかない。内外の先端的な図書館は「在来の図書館とデジタル図書館との間の連続体」として、「電子的情報資源と紙ベースの情報資源が並んで利用される」、すなわち「ハイブリッド図書館」へと移行しつつある（永田治樹「サービス戦略としての図書館ポータル」、『情報の科学と技術』51巻9号、2001年）といわれる。電子化にともなうコンテンツの多様化にどう対応していくのか、永田治樹氏（学術情報論）は、外部委託（アウトソーシング）の急速な進展に触れて、レファレンスなどの図書館業務の中核的（コア）な部分もきちんとやってくれる業者が現れつつある現在、図書館は「顧客」との関係を今まで以上に重要視しなければならない、と語っている（本年8月の研修会「現代の大学図書館をとりまく環境と課題」での講義）。

本学附属図書館は専任司書13名に臨時職員10名（内5名は司書）を加えた陣容で、受入、整理、情報処理、運用、等の各種図書館業務にあたっているが、開設専攻語だけでも24言語をかかえるという多言語をあつかう図書館（所蔵60万冊の内、外国図書は約55%、33万冊）の実際の業務はかなり複雑であり、専門性を要求される。通常の図書館業務はもともと深刻な人手不足の状況にあり、今年6月から夜間の貸出業務を午後8時45分までに延長し、土曜日も貸出業務を行うようにしたが、日・祝日の開館となると現在の陣容では手が届かない。それでも定員削減は容赦なく実行される。あとは職員個々人が志を高くして自己の能力を飛躍的に高めるしかないというのが、噛みしめるべきリアリズムであろう。来年10月に開館予定の国立国会図書

館関西館や近くの大学図書館との連携を視野に入れた新たな模索から活路が切り開かれるかもしれない。

フランス語の綴り字について

地域文化学科助教授（フランス語）
木内　良行

一昨年 *Seuil* 社から出版された *Nouvelle histoire de la langue française*（「新しいフランス語の歴史」）という本の冒頭には、本書は「新綴り」が使われており、*apparaitre*、*bruler*、*il cèdera* 等の綴りは標準の綴り（*apparaître*、*brûler*、*il cédera*）とは異なるけれども誤りではない旨、但し書きが添えられている。「新綴り」というのは、1990年に、フランスのフランス語高等審議会で作成されて、アカデミーフランセーズで承認され、官報で公表された「正書法修正」という文書にもとづく綴り字の修正案のことである。何故「新綴り」があるのか、またそれが公表されてかなりの時間がたっているにもかかわらず、何故いまだにそのような但し書きが必要となるのか、以下ではその事情について少々述べてみたい。

フランス語を少しでも学んだことのある方なら、その綴り方がいかに複雑かということは御承知であろう。その複雑さというのは、単に、アルファベット26文字でもってフランス語にある30以上の音素を表さなければならないために一つの音に複数の綴り字やアクセント記号を用いなければならないということだけではない。逆に、一つの音に複数の綴り字が対応している場合が少なくない。例えば、[o] 一つの音を表すのに *o*、*au*、*eau* という具合に何通りもの表記法があったりする。また、語末の子音字などで、書くけれども読まれないという綴り字も数多く存在する。ただし、音と綴り字（の組み合わせ）の対応については英語よりは、はるかに規則的ではある。よって、フランス語は綴り字から発音の再現は比較的容易ではあるが、音だけ聞いてその綴り字を再現するのは、その語を理解できなければ困難な場合が多い。このような表記法が生じたのには歴史的な背景がある。フランス語で書かれた文書がまとまった形で現れるのは12世紀以降、それ以前にもフランス語で書かれたものは僅かにありはするが、書き言葉は専らラテン語であった。フランス語が書き言葉として成立するにあたって、その綴り字のモデルとされたのはもちろんラテン語である。ただし、フランス語は他のロマンス語と違って音の変化の度合いが甚だしく、ラテン語の時代からフランス語へと徐々に変化を遂げていく段階で、母音の変化のみならず、語末の音が次第に消えていってしまい、その結果、多くの同音異義語が生じた。それを書き分けるために、かつて発音されていたであろうと推測される音に対応する形で綴り字を残していったという経緯がある。フランス語の綴り字が標準化され始めるのは16世紀、印刷技術が発達しはじめた頃であり、それがほぼ現在に近い形になるのは17世紀末のアカデミーによる辞書の編纂以降である。もちろんそれ以前の手書きの文書しかない時代においても、不統一ではあるにせよ慣習によるある程度の標準化は存在していたわけで、その従来の綴り方、及び発音と語源の間で、いかに折り合いをつけるかというのが、当時の辞書編纂者達の大きな課題のひとつであったはずである。結果として出てきたものは、かなりの工夫がなされているとはいえ、当然のことながら、ある程度までは妥協を余儀無くされ、恣意的にならざるをえなかった。アクセント記号の表記の仕方や、綴りの組み合わせの規則性が中途半端にしか考慮されなかった場合も多いし、語源がすべて生かされているとも言いがたい。例えば、母音の前で発音されなくなった *e* は、*eage* → *âge* という具合に、*e* をアクセント記号で置き換える原則をたてはしたものの、それが何故かすべての語には適用されず、かつて *seur*、*asseurer*、*asseoir* と綴られていた語は、その後のフランス

語ではそれぞれ *sûr*、*assurer*、*asseoir* となり、ばらばらな形のままで残されてしまった。その他、派生語間の綴り字の不統一も数多い（例えば、*carrosse*、*charrette*、*charrier* に対して *chariot*）。その後、過去分詞の一致（これも相当にややこしい）などの文法規則にかかわる部分が付け加わり、綴り字にもわずかな変更が加えられて、19世紀半ばにほぼ現代の綴り字の体系ができあがる。その時代は、印刷物の急速な普及、教育の一般化が進んだ時代でもあった。しかし、それに伴い、書き言葉の一層の標準化が進んだ結果として、もともとあった綴り方の不規則、不合理な部分は修正される機会を失ってしまい、逆にそれがフランス語の伝統的な「特殊性」として温存されることとなり、ついにはその特殊性がフランス文化の一部を成すものとして絶対視されるにいたった。そうなると、もはやそれに手を加えることは容易ではない。その結果、フランス語の外国人学習者のみならず、フランス人自身もその複雑さに苦しめられることとなっているにもかかわらずである。

1990年の修正案というのは、上記の、綴り方の不規則で恣意的であった部分に関するものであった。例えば、アクセント記号の省略（*brûler* → *bruler*、*connaître* → *connaitre* 等）、発音と綴りとの一致（*événement* → *évènement*、*je céderai* → *je cèderai* 等）、外来語や合成語の複数形の簡素化（*tempi* → *tempos*、*sans-abri*(複数) → *sans-abris* 等）、その他、派生語間の綴り字の統一、ハイフンの使用や使役文における過去分詞の一致規則の簡略化など、つまり覚えにくく間違いやすかった部分のみの是正を目指したものであり、綴り字の基本のシステムにかかわる修正ではない。この程度のわずかな変更であっても一般に受け入れられるのはやはり簡単ではないようで、公表当時はメディア等の相当な反発があったようである。しかし、そもそもフランス語の綴り字に関してはそれが正しいがどうかを判断するような法律があるわけではなく、従って「修正案」自体ももちろん何の強制力も持ち得ない。新旧どちらの綴りを使うのかは、基本的に使用者の判断にまかされている。そして、メディアは概して保守的である。教育の現場等における、とりわけ若年層の書き言葉の乱れ、特に綴り字の混乱については従来より度々話題にはなり、その問題についての一般の認識はあると思われるものの、国をあげて改革を支援、推進するというには程遠いというのが現状のようである。現在のアカデミーの辞書や、フランス語の一般向けの代表的な文法書のひとつである *Le bon usage* にはもちろん新綴り字の記載があるが、一般向けの辞書、例えば昨年新たに改訂版が出版された *Petit Robert* などには、前回の改訂同様、*évènement* 等のメディアで話題になった語、合成語や外来語の扱いを除いて修正案はいまだ一部しか採用されていない。出版物の大半がいまだ従来の綴り方に従っている以上はこれもしかたがないことかもしれない。ただし、「新綴り」が徐々に浸透しつつあるのも事実で、新綴り推進を目指す *APARO (Association pour l'application des recommendations orthographiques)* というベルギーのグループによれば、「新綴り」がすでにフランス語圏のいくつかの雑誌等の出版物では使用されており、ベルギーではすでに多くの教育機関で教えられているという。少なくとも我々にとっては、「新綴り」がフランス語学習に伴う労力の負担の軽減につながることは明らかであって、フランスにおいても、冒頭にあげた本のように、但し書きつきではあっても、*Seuil* のような大手の出版者から新綴りによる書物が出版されたのは喜ぶべきことであり、さらなる普及を願う次第である。

なお、1990年の官報の綴り字訂正に関する報告書は、*HANSE*、*Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne*（第三版）、*Duculot* の巻末に全文が掲載されている。また、インターネット上にも新綴り関連のいくつかのサイトがあり、例えば上記の *APARO* では、解説に加えて、新綴りによる常用語800語のリストも見ることができる。日本では、クラウン仏和辞典（第五版）に簡単な説明がある。新綴りに興味のある方はそれらを参照していただきたい。

ヒンディー語文献の書誌情報及び画像データベース作成プロジェクトの成果公開に際して

本学名誉教授　古賀　勝郎

このたび本プロジェクトが完成を見、公開が可能となったことは欣快の至りであります。今日に至るまでこのプロジェクトに携わって来られた各位の大変なご苦労とご尽力に対し心よりの敬意と深い感謝の念を捧げます。学校当局のご支援はもとよりのことでありますがプロジェクトの企画から推進の一切に傾注してこられた岸本晴広氏と同氏を支えて下さったスタッフの皆様の熱意が教官と作業を担当した卒業生並びに在校生のご協力と相俟って今日を迎えることが出来たものと思います。

申すまでもないことなのですが、大学図書館は大学の生命線に喩えることが出来ようかと思います。それの充実なくして大学は本来の機能を全く発揮し得ません。わけても本学のように戦後に新制大学として発足した大学は、こと図書館に関する限りごく一部の分野を除き真に劣悪なものであったと申しても過言ではありません。勿論このことは近代日本における大学教育の歪みに最大の原因があるわけです。身近な例を挙げるならば古代インドの思想や宗教、あるいは、古典語の研究、教育は明治時代から旧帝国大学に位置づけられていながら近、現代に関するものには注意がほぼ向けられて来なかったのが実状でありました。ヒンディー語文献に即して申しますと大阪外語においてヒンディー語を教授するようになるのは新制大学が発足する頃からでありそれまではヒンドスターニー語という名称で英領インドの公用語、今日のパキスタンの国語でありインド連邦共和国の公用語の一でもあるウルドゥー語を中心に教えて来ていました。第二学年次からのヒンディー語課程とウルドゥー語課程が分けられたのは1958年のことでありました。第二次大戦及び敗戦後の混乱と日本経済の疲弊のため外国からの図書の購入は長期に亘り厳しく制限されたり全く不可能となったり致しました。この間の事情の一端を手許に残る1963年時点での蔵書記録（数字はあくまでも概数であり文学書として数えたものの中には翻訳書や狭義の文学書には入らないものも含む。[ ]内の数字は1949年までの蔵書数を示す。）によって説明致しますと次のようになります。

ヒンディー語	語学書	100[8]	文学書	306[3]
ウルドゥー語	語学書	95[50]	文学書	61[21]
ベンガル語	語学書	6[4]	文学書	71[1]
サンスクリット語	語学書	57[11]	文学書	37[23]

学生用の教材や辞書が書店を介してなんとか購入できるようになったのが'60年頃でありヒンディー語図書が本格的に購入出来るようになったのはようやく'70年代に入ってからでしかありません。それは日本の経済発展により外貨事情が大幅に改善されて初めて可能になったわけです。'60年代初めと今日の円とインドルピーとの交換比率はルピーが円の約25分の1となり書店のレートもそれにほぼ比例したものになっています。

最近は状況が変化しつつあるようですが本学図書館での専門図書の購入は従来は例外的な場合を除き毎年配分される極めて少額の教官研究費に頼って来ました。その研究費の費目を図書と図書以外に分けるのも教官自身でありました。学科別、専攻別、言語別に蔵書数や蔵書の内容を見ると大きな相違や際立った傾向や特徴が見られるのも専攻分野や関係する教官数、それに教官の専門領域に大きな関わりがあるわけです。そういう観点から見ればヒンディー語に限らずごく一部のものを除き本学の東洋諸語の蔵書は充実には今なお程遠い状況にあるものと思います。

本学の存在意義が世界諸国との真の文化交流に活躍できる人材の養成にあるとすればその拠点となる図書館の更なる充実への期待が大なることは申すまでもありません。学長や図書館長が書庫の狭隘さに頭を悩ますことなく図書の充実に専念出来る日の来ることを切に祈らざるを得ない現実は余りにも悲しいものであります。

本プロジェクトの意義は単にヒンディー語図

書に限らず本学が蓄えて参ったささやかな財産が他大学や研究機関、そして一般市民にとっても一段と開かれたものになり他との交流と相互利用が増進される契機となることにあります。学問や知識や情報が益々国民全体のものとなり国際的に開かれたものとなる一つのきっかけを作る上で本プロジェクトが貢献出来ることにつきまして関係各位のご尽力に改めて敬意を表し重ねて御礼を申し上げる次第です。

最後になりましたがこの機会に本学のヒンディー語図書の充実に大きな寄与のあった卒業生の武藤友治氏（武藤文庫）並びに長く教鞭を取って本学のヒンディー語教育の基礎を築く傍らヒンディー語文献の充実に鋭意努力しかつまた昨年には数百冊の文学書を本学図書館にご寄贈下さったDr.L.D. Malaviyaに深甚なる感謝を申し上げます。誠に有り難うございました。

2001年7月5日

ヒンディー語文献の書誌情報及び画像データベース完成

附属図書館では、3年前よりヒンディー語文献の書誌情報及び画像データベースの作成を行って参りましたが、この度プロジェクトが完了し、平成13年7月5日、ヒンディー語書誌情報約10,000件、画像データベース16,000件（タイトルページ＋目次）をインターネット上に公開をいたしました。是非http://203.181.31.110/hindi/へアクセスしていただき、ご意見・ご感想をお聞かせいただければ幸いです。

作成経過

① 本学附属図書館では、約60万点の蔵書があり、その内約60%を外国図書が占めています。

② 非アルファベット文字で表記される言語のうち、インドの公用語であるヒンディー語は、中国語に次いで本学では最も多く、約1.3万点を所蔵しています。これはわが国では最大のコレクションであり、本国インドを除けば世界的にも屈指の蔵書数といえます。

③ 蔵書の内、約60%、36万点がオンラインデータベース化されているが、非アルファベット文字については、これまでほとんど本格的な電算処理が行われておりませんでした。8年前からヒンディー語の翻字化（ローマ字化）作業は開始していましたが、平成10年度から3ヵ年間、科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けたのを契機に、データベース作成プロジェクトを開始し、ここにその成果の公開に至りました。

④ 約8年間に亘ってのヒンディー語専攻教官はもとより、非常に多くの同語学専攻の大学院生、学部学生の皆さんの協力と、惜しみない努力によりこのデータベースの完成が可能となりました。

概　要

① デーヴァナーガリー文字（ヒンディー語及びサンスクリット語等に使用する文字）のローマ字化の方法は、インドのみならず世界中で統一性がなく、検索するには大変に不便な状態にありました。

② 今回のプロジェクトでは、このような不便を解消するため、書誌情報は国立情報学研究所のデータフォーマットに完全準拠するとともに、ローマ字化はLC（Library of Congress）翻字表に基づきデータ入力を行いました。

＊注　ALA-LC Romanization Tables,1997

③ さらに翻字化書誌を補完する情報として、図書資料のタイトルページ及び目次を画像としてデータベース化しました。これを翻字化した書誌にリンクして、デーヴァナーガリー文字そのものにもアプローチできる情報を提供するためです。

④ 書誌と画像情報をリンクさせたヒンディー語文献のデータベース化及びネットワーク上への公開は、我が国でも初めての画期的なプロジェクトと位置付けることができます。

⑤ 画像データの作成に際しては種々の方法を検討いたしましたが、対象資料をマイクロ

フィルム撮影し、マイクロフィルムから画像を作成、作成した画像にマスキング及びノイズ除去処理をし、さらに解像度を600dpiから400dpiに変更しPDFで提供することとしました。

⑥これは世界的にも有用なデータベースとなり、日本国内はもとより世界の学術研究の向上に大きく貢献できるものと考えております。

資料検索とシステム

①デーヴァナーガリー文字によるヒンディー語資料検索システムは、HP（ホームページ）上の仮想キーボードからマウス操作で入力することにより、利用者のコンピュータでのデーヴァナーガリー文字フォントの有無に関わらず検索することができるシステムです。

②書誌情報はLC翻字表によりローマ字化して入力しているため、従来はこの規則を知らない場合には、検索は不可能でしたが、このシステムでは検索が可能です。

③OS（オペレーティングシステム）には、Vine LINUX、WWW(World Wide Web)サーバー（ウェブサーバー）用ソフトにはApache、アプリケーション開発にはPHP(Hypertext Preprocessor)、データベースにはPostgreSQLを使用することにより、安価でかつ高速な検索を実現できました。

④このシステムでは、ヒンディー語資料の検索結果として、書誌・所蔵の文字情報だけでなく、前記の画像情報も表示可能である事は言うまでもありません。

⑤今後普及していくUCS（Universal multiple-octet coded Character Set:国際符号化文字集合）というコード化文字セットを使用すれば多言語対応が可能ですが、既存データについてはどこまで対応できるかは、現在のところ不明です。

⑥このシステムは、現状でのUCS未対応時期における、単なる代用システムでは終わらないものと考えております。その理由は、この検索システムが、インド諸語、ビルマ語、タイ語等の言語にも対応が可能であり、多言語情報システムとして大きな汎用性を有しているからです。

著作権等について

当サーバ(http://203.181.31.110/hindi/)で提供するデータの全ての所有権・著作権は大阪外国語大学附属図書館に属します。

提供する全ての著作物は、著作権者の承諾を得ること無しに、全部または一部を複製・改変・再配布・販売する事を禁じます。

著作物を、印刷媒体、CD-ROM、VTR、放送、講演等で利用される場合は、事前に図書館専門員（0727-30-5122）へご相談下さい。

オンライン以外(CD-ROM、印刷物等)での提供・頒布は行っていません。

このデータベース作成に関わった方々(敬称略)
総合統括
古賀　勝郎　名誉教授
溝上　富夫　地域文化学科教授　2000.4.1～
相談者
桑島　昭　名誉教授
高橋　明　地域文化学科助教授
書誌及び画像作成
大学院生及び学部生
長崎広子、松木園久子、西岡美樹、平松靖史、新美貴士、安川崇、小松久恵、西尾里織、水田健吾、重国佳江、的場奈々子、浅井雅美、岩野直子、斎藤若菜、内徳佳小里、松本めぐみ、村上佑介

岡本　武　図書館長
是永　駿　図書館長　2000.5.16 ～
事務処理、補助
附属図書館職員一同

システム開発・製作・協力
株式会社イメージング・サポート
(大阪市中央区博労町 1-2-1)
有限会社ぱわー・あしすと
(大阪府門真市末広町 1-7　安藤ビル 201)

総合研究棟（仮称）建設計画に関して

1．総合研究棟建設計画に対する附属図書館の考え方

①基本的には平成13年度概算要求で提出されたマルチメディア・言語社会研究棟（仮称）への図書館にある視聴覚教育施設の移設については、図書館の方針は変更なく、了承しております。

②視聴覚施設の移設後は、速やかに図書館の全面改修を行い、総合研究棟との連携をはかりつつ、これまでの図書館から進化した21世紀型図書館としたいと考えております。

③平成13年5月現在の図書館建築基準による必要面積は7,306 ㎡です。現在図書館棟の面積は6,552 ㎡であり、視聴覚施設を組み込んだ現状でも754 ㎡が要整備面積となります。

④本学施設課積算による図書館棟内の外国学部分の使用変更651 ㎡を引いても(基準5,556 ㎡)、約1,100 ㎡を図書館から総合研究棟へ拠出することとなります。

⑤図書館としては総合研究棟建設計画より、移転後20余年を経て書庫スペース、閲覧座席等の施設の狭隘部分を克服でき、これからの時代に即応した新図書館像を構築できる最大のチャンスと言えます。

⑥その意味でこれまでの図書館を自己点検・評価をする中で、図書館情報メディア開発及び情報発信基盤、支援体制強化を方法化し、総合研究棟との有機的連結対としての図書館へと進化していきたいと考えております。

2．これからの図書館像に向けて

①図書館への信頼性の確保

・自己点検・評価を待たねばなりませんが、知的遺産集積の場としての図書館（情報の生成・流通・蓄積）が、コンピュータを媒介にして今や利用者に情報の受発信機能をも提供する場へと移行してきています。図書館が大学における教育研究の基幹施設・機能を持ちつづけながら、全資料(コレクション)のデータベース化と、それによる電子図書館・IT図書館への転進を計る必要性があります。

②メディアミックス型図書館

・大学図書館の利用のパターンは、講義・演習・実習・試験に関連する自学自習、卒論・修論・博士論文作成、自己の調査研究、教養の増進と読書、座席の確保などの物理的空間提供の持つ意味(近年のデジタル情報への偏重と活字離れ)から、快適な閲覧空間の提供へとシフトしつつ、活字資料とネットワーク経由の資料・情報の両者が同時的に利用できるメディアミックス型図書館へ進化する方向にあります。

③共同研究・開発を支援する図書館

・電子図書館機能の内容が問われる事となりますが、単に書誌・所蔵情報のデジタル化に留まらず、資料そのもののデジタル化、コンテンツ情報の生成、コンコーダンスをも当然に組み込む必要があり、メディア開発によるコンテンツ情報発信が可能となる体制を構築しなければなりません。

④地域・社会に開かれた図書館

a．地域住民の生涯学習に資する大学図書館として制度・運営体制の整備は当然ですが、より積極的に大学の研究成果の公開と資産の有効利用を図りたいと考えます。例えば本学サテライトが設けられた場合、図書館分室(市民ライブラリー)を置き、「外国学」資料の提供、“本館”資料の貸出、情報にアプローチできるデジタル機器設置・提供、などの方策を検討しています。

b．大阪大学図書館、箕面市立図書館等北摂地区のネットワーク体制の確立と連携も検討しております。

⑤図書館環境の改善

・資料は増加の一途を辿っており、図書館機能の進歩・発展に対して、物理的な環境を変えることは無理で、書架の増設、部屋の用途変更で対応はしておりますが、もはや限界に近く、総合研究棟建設によるスペースの増加は図書館にとって最後のチャンスといえます。

3．図書館と総合研究棟との有機的関係性について

①図書館の4、5階にある視聴覚教育施設の移設により、総合研究棟は情報処理センターの設置と相俟って、マルチメディア型研究棟ともなります。「総合学術情報メディアセンター棟」と言うべき機能を有することとなり、デ

ジタル情報の利用環境、社会へのセンターの開放、デジタル情報生成、コンテンツ整備・開発、そして情報発信基盤となります。

②図書館では昭和37年よりLL(Language Laboratory)を運営してきており、視聴覚教育に関するノウハウを蓄積しています。それをより発展させるためのラーニング・リソースセンター的共同研究部門を強化していかねばならなりません。具体的にはマルチメディア外国語教材の開発・研究・生成により社会に成果物を還元していく必要があります。

③多言語対応情報システム等により、言語学習理論の普遍化、コア・カリキュラム開発を中心とするプロジェクトによる共同研究のサポート、トータルな語学習得を展望し教材の開発プロジェクト等による共同研究、効果的な言語習得法の研究・開発を推進していかなければなりません。

④国立国会図書館関西館が来年度開館し、関西館は東南アジア関係資料を重点的に収集することになっていることから、本学が京都大学東南アジア研究センターと連携し、デジタル情報の相互利用と生成を行い、本学での情報の開発、作成、成果を共同提供していくことも視野にいれております。

⑤学術情報発信をサポートするものとして、大学での出版、研究発表等をマネージメントする機関、また財団を大学内に設置する必要があり、その機関は総合研究棟で大学院生、教官、研究者への強力な支援体制をもつものとなります。

収書専門部会の活動について

大学運営システム改革に伴い、平成13年度より図書館委員会が改組され、図書館委員会に収書専門部会が設置されております。

これまでの収書委員会の経過

1．附属図書館では、昭和54年の移転を契機に収書委員会規程(図書館内規＝図書館長裁定)を改正し図書館収書方針を明確化し、その後2度に亘って見直しを行いました。昭和63年からは図書委員の教官も収書委員として参加する体制となりました。

2．収書の対象は予算額が極めて少ない事から、学生用教育図書費（基本的に和書購入費）の枠内に留まらざるを得ず、体系的な蔵書構築を目指して収書方針を策定しても、現実には不可能なことでした。そのため“「外国学」を網羅的に収集する”という基本的な収書方針のみで、本学の蔵書計画を抜本的に見直しをすることができませんでした。

3．図書資料費増額要求を毎年度提出しているものの、認められておりません。

4．箕面移転以降の20数年でも、図書単価の大幅アップ、消費税の導入・税率増加（3%→5%）等で「外国学」の網羅的収集も90%から70%以下に低下しており、また、利用者のリクエストにも全て応えることができないのは心苦しい限りです。洋書や年度毎の特別収書方針案に基づく購入などは、到底不可能でした。

今後の収書専門部会の活動について

1．これまでの収書委員会を引き継ぐ形で、収書専門部会が発足し、部会が認めた者として図書館職員が委員として参加する体制となりました。

2．さらに、大学院生2名が部会が認めた者として委員として参加できるようになりました。

3．収書方針の策定、収書基準の策定、蔵書構成に対する方針及び予算案の策定、資料運用基準等の策定を行います。

運用係（2階カウンター）からのお知らせ

☆『図書館利用案内』が新しくなりました。

『大阪外国語大学附属図書館 利用案内』の内容とデザインを一新しました。この『利用案内』は2階入口近くに常備していますので、ご自由にお取り下さい。カラー刷・イラスト入りで読みやすくなり、図書館の利用について簡潔にまとめてあります。図書館の使い方がわからない時や資料を探していて困った時などにご利用下さい。

☆今年度の書庫内資料検索ガイダンス

卒論提出予定学部生と大学院生を対象に実施している書庫内ガイダンスは、書庫内資料の説明と雑誌記事索引の使い方などの検索ガイダンスをあわせて行い、ガイダンス修了者には「入庫許可証」を発行しています。今年度の書庫内ガイダンスは、卒論ゼミクラス単位での参加が例年の3～4ゼミから33ゼミへと大幅に増え、修了者は既に昨年を上回る400名以上（対象者の約4割）になっています。

なお、今年度のガイダンスは10月15日～19日が最終となります。

☆平日のサービス時間延長と土曜日の貸出・返却業務の開始

以前から要望の強かったサービス時間延長を6月1日から実施し、平日の貸出・返却を午後8時45分まで延長し、土曜日にも貸出・返却が出来るようになりました。これに伴い6月以降、土曜日の利用が増えてきています。

☆書庫内資料の移動

図書館の収蔵能力が限界にきています。特に雑誌のバックナンバーは所定の場所に収まらず、ご不便をかけていました。そこで、夏休み期間中に書庫内資料の移動を行い、1階の旧分類図書（新制大学になる前の蔵書）を3階に移動し、その空きスペースに中国語雑誌等を配架しました。

☆自習室が10月から12月まで使えません。

大学会館改修のため、10月1日から12月末まで1階自習室は非常勤講師控室として使用されます。自習室が使えず、ご迷惑をおかけします。

*** 平成12年度 貸出図書ベスト30 ***

貸出回数	請求記号	書名 / 著者名
27	913.6 R 上	ノルウェイの森 / 村上春樹著
23	913.6 R 下	ノルウェイの森 / 村上春樹著
17	829.76 294	Elementary modern standard Arabic / edited by Peter F. Abboud, Ernest N. McCarus
15	290 R 17	韓国（ﾌﾞﾙｰｶﾞｲﾄﾞ・ﾜｰﾙﾄﾞ） / ﾌﾞﾙｰｶﾞｲﾄﾞ海外版出版部編
15	329 188	国際法キーワード（有斐閣双書） / 奥脇直也, 小寺彰編
14	290.8 R	地球の歩き方 : ドイツ / 地球の歩き方編集室編
14	290.8 R	地球の歩き方 : フランス / 地球の歩き方編集室編
14	290.8 R	地球の歩き方 : スペイン / 地球の歩き方編集室編
13	290.8 R	地球の歩き方 : タイ / 地球の歩き方編集室編
13	290.8 R	地球の歩き方 : インド / 地球の歩き方編集室編
13	913.6 R 上	ダンス・ダンス・ダンス / 村上春樹著
13	913.6 R	Tugumi（つぐみ） / 吉本ばなな著
13	933 1202 1	赤毛のアン（完訳ｸﾗｼｯｸ赤毛のｱﾝ） / L.M.ﾓﾝｺﾞﾒﾘｰ著,掛川恭子訳
13	913.6 R 下	ダンス・ダンス・ダンス / 村上春樹著
13	361.6 294 22	日本人のまっかなホント / ジョナサン・ライス, 嘉治佐保子, 浜矩子著 ,小林宏明訳
13	290 R 12	東南アジア（ﾌﾞﾙｰｶﾞｲﾄﾞ・ﾜｰﾙﾄﾞ） / ﾌﾞﾙｰｶﾞｲﾄﾞ海外版出版部編
13	290.8 R 26	地球の歩き方 : イギリス / 地球の歩き方編集室編
12	167 582	イスラム教入門（岩波新書） / 中村廣治郎著
12	288 142	世界の国旗全図鑑 / 辻原康夫編著
12	290.8 R	地球の歩き方 : 台湾 / 地球の歩き方編集室編
12	290.8 R	地球の歩き方 : パリ / 地球の歩き方編集室編
12	886 75	実践ロシア語教程 / 小野理恵編著
12	816 128	レポート・論文の書き方入門 / 河野哲也著
12	815 321	はじめての人の日本語文法（はじめての人ｼﾘｰｽﾞ） / 野田尚史著
12	815.9 9	日本語のシンタクスと意味 / 寺村秀夫著
12	801.04 409	子どもたちの言語獲得 / 岩立志津夫［ほか］著 ,小林春美, 佐々木正人編
12	329.01 27	はじめての国際法 / 畝村繁著
12	302.2 133 [6]	フィリピン（ﾎﾘﾃﾞｲﾜｰﾙﾄﾞ） / 中尾重嗣編
12	291 R	神戸・淡路島/ﾌﾞﾙｰｶﾞｲﾄﾞﾆｯﾎﾟﾝ編集部編
12	913.6 R	国境の南、太陽の西 / 村上春樹著
12	290 R 4	タイ（ﾌﾞﾙｰｶﾞｲﾄﾞ・ﾊﾟｼﾌｨｶ） / ﾌﾞﾙｰｶﾞｲﾄﾞ・ﾊﾟｼﾌｨｶ編集部編
12	290.8 R 6	地球の歩き方 : 中国 / 地球の歩き方編集室編
12	290.8 R	地球の歩き方 : スペイン留学 / 地球の歩き方編集室編

*** 平成12年度　図書貸出統計 ***

区分	総記	哲学	歴史	社会科学	自然科学	技術工学	産業	芸術	言語	文学	計	
月	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	冊数	人数
平成12年4月	101	173	434	827	56	73	50	110	666	635	3,125	1,701
5月	160	318	817	1,382	87	87	73	163	891	838	4,816	2,694
6月	156	304	909	1,351	87	124	81	217	846	869	4,944	2,818
7月	142	459	1,060	1,659	88	126	79	284	1,222	961	6,080	2,712
8月	44	150	376	556	29	40	24	61	266	278	1,824	824
9月	170	698	1,445	2,120	104	169	110	273	923	940	6,952	3,637
10月	188	365	917	1,617	118	146	77	232	1,020	1,079	5,759	3,172
11月	186	346	972	1,725	95	165	79	193	951	964	5,676	3,035
12月	260	569	1,256	2,206	165	192	109	249	1,353	1,154	7,513	3,486
平成13年1月	170	494	1,329	1,965	154	117	63	292	1,141	894	6,619	3,594
2月	87	343	707	1,100	88	38	59	141	708	733	4,004	1,677
3月	42	45	143	160	17	9	7	36	175	152	786	358
合　計	1,706	4,264	10,365	16,668	1,088	1,286	811	2,251	10,162	9,497	58,098	29,708
開架率(%)	92.06	90.48	92.32	91.50	88.05	94.25	90.75	92.45	79.47	81.69	平均開架率	89.30

*** 平成12年度　利用統計 ***

区分	昼間主				夜間主				大学院前期課程		大学院後期課程		
月	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	1	2	3
平成12年4月	2,498	1,713	2,111	1,690	382	270	402	483	674	369	129	49	64
5月	3,173	2,984	3,739	2,864	600	533	710	1,015	910	543	160	58	101
6月	3,489	3,128	4,058	3,130	627	634	832	1,019	837	562	161	42	86
7月	2,168	1,950	2,406	2,503	460	507	543	842	527	548	178	39	63
8月	570	426	428	741	92	83	133	246	94	170	69	12	64
9月	5,583	5,248	3,996	3,141	866	1,086	886	915	398	466	109	38	97
10月	2,827	2,893	3,456	3,902	475	659	734	1,090	581	569	109	47	87
11月	2,965	2,925	3,486	3,890	518	601	789	1,013	520	546	117	44	78
12月	2,164	2,245	2,516	3,574	440	427	650	863	379	471	66	38	85
平成13年1月	4,677	4,410	3,988	2,992	775	940	883	790	342	341	94	40	92
2月	1,790	1,721	1,630	1,124	494	407	340	299	173	140	55	37	83
3月	63	140	263	191	42	21	51	65	96	61	24	15	38
合　計	31,967	29,783	32,077	29,742	5,771	6,168	6,953	8,640	5,531	4,786	1,271	459	938

区分	留学生			研究生	聴講生	卒業生	非常勤講師	私学研修員	外国人研究者	教職員	学外者	その他	合　計
月	1	2	3										
平成12年4月	109	225	0	63	0	178	272	3	2	450	60	795	64
5月	109	94	0	211	63	249	270	0	0	354	87	914	101
6月	202	61	0	302	109	303	260	0	27	360	45	308	86
7月	124	73	0	238	83	129	146	0	62	267	68	260	63
8月	82	45	0	74	7	67	32	0	20	99	50	89	64
9月	103	77	0	269	61	116	177	0	20	269	61	318	97
10月	74	132	8	237	83	60	221	0	17	296	67	261	87
11月	40	77	34	218	82	55	250	0	31	300	51	258	78
12月	46	100	25	116	59	42	172	0	7	232	32	218	85
平成13年1月	29	149	25	129	80	41	167	0	7	265	22	285	92
2月	43	137	26	123	11	34	136	0	5	189	61	280	83
3月	22	53	14	52	1	34	31	0	0	122	22	212	38
合　計	983	1,223	132	2,032	639	1,308	2,134	3	198	3,203	626	4,198	16,679

平成13年度大阪外国語大学司馬遼太郎記念学術講演会

本講演会は，作家司馬遼太郎氏の業績を偲ぶと共に，その遺産を継承するため，比較文明論的な観点から日本を論じる公開講座として，平成11年度より開催しております。

本年度は『日本文化の歴史と可能性』をテーマとし，下記のとおり実施いたします。

平成13年9月29日（土）13:30～16:30　　大阪国際交流センター
入場無料　　[大阪市天王寺区上本町8-2-6]

《総合司会　是永　駿（本学附属図書館長）》
開会挨拶　赤木　攻（本学学長）

第一部＜講演＞
①陳　舜臣（作家）
「日本文化とアジア」
②荻野アンナ（慶応大学助教授）
「日本とフランス」
③ドナルド・キーン（コロンビア大学名誉教授）
「歴史と文学」

第二部＜座談会＞
陳舜臣，荻野アンナ，ドナルド・キーン
テーマ：「日本文化の歴史と可能性」

表紙および９頁の写真について

本学が1990年に受け入れた大型コレクションの中にチュルク系諸言語コレクションがあり、全体で2,752冊、現代トルコ語が多数を占めていますが、オスマントルコ語も65冊あります。その中にオスマントルコ語の貴重図書（表紙写真）が含まれています。BULAK版と言われるエジプト・カイロで出版されたもので、書誌は以下のとおりです。

Marifet-name / Ibrahim el-Hakki. -- (BA11633137)
Bulak [i.e. Cairo] : Matbaatul-kubra, 1251 [1835?]
563 p. ; 33 cm

「知識の書」と呼ばれるもので、全ての学問領域を含む百科全書のようなものです。目次の造り方が非常に面白く、写真のように１マスごとにそれぞれの目次記述があり、天文学から解剖学、思惟や知覚のあらゆるものが対象物となっています。

序文には、『人間にとって、もっとも重要なものは神についての知識である。しかし、それは、創造物や肉体についての知識に結びついており、肉体についての知識は世界についての知識に依拠する。世界についての知識は、実在についての知識と同値であるので、天体や哲学、解剖学、心や精神に関する情報が必要である。（よってそれらについての情報を）まとめて引用し、トルコ語に翻訳し、この本を成した。本書は序章、３章、終章からなり、序章ではイスラームの秩序と世界の状況についての要約、第１章では世界の秩序と倫理や形而上学、第２章では人間についての学問、第３章では（神秘主義的な）精神の喜びについて、そして終章では、親しい人々との会話の作法や基礎を扱う。』とあります。

◆編集後記◆

○大学を取り巻く状況が騒がしくなってきていますが、大学図書館も本当の試練の時代に突入したようです。21世紀になり本学も創立80周年を迎えようとする時、大学図書館のあるべき姿が大きく変容しようとしています。コンピュータ導入以後の遡及入力を中心とするカードレス時代から、本格的な電子図書館への移行の時代に入ろうとしています。これまでの歴史的経過を踏まえながら、大学図書館の〈往路〉に対する総括を行いその生じてきた問題点を分析し，〈帰路〉をどのように生きる大学図書館にしていくかが問われているのだと思っております。今号の図書館長の「図書館の現在」もそれを物語っています。

○昨年度から旧分類図書の遡及プロジェクトを始めていますが、現在約3,000冊の遡及入力が出来ています。教育研究学内特別経費（学長裁量経費）による特諸言語整理（遡及を中心に）でアラビア語、ウルドゥー語の整理〔コンピュータ入力〕を行っていますが、それと並行して科学研究費補助金（研究成果公開促進費）による中国語資料のデータベース化（３ヵ年計画）にも着手しています。中国語雑誌のデータベースは今年度内に完了予定で奮闘しています。

（専門員　岸本 晴広）

大阪外国語大学附属図書館報《Library　Information》　第14号

２００１年９月２６日発行
発行　大阪外国語大学附属図書館　〒562-8558　大阪府箕面市粟生間谷東８-１-１
電話　０７２７－３０－５１１１（代表）